

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2012年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科 コミュニティ福祉学 専攻	
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・教授	福山清蔵
研究課題名	高齢者夫婦の心中の背景としての介護問題	
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名
	コミュニティ福祉学研究科・コミュニティ福祉学専攻・2年	柳 ジョンヒ
研究期間	2012年度	
研究経費	100千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は高齢者夫婦の心中の背景としての介護問題に関する研究である。筆者は新聞記事を分析資料として用いて内容分析を行い、高齢者心中と介護殺人事件に絞り込みその要因について検討した。それに加え、支援者の視点から男性介護者の具体的な制度の利用状況と支援の課題について、現在介護者を支援しているケアマネージャーにインタビューを行い、男性介護者の置かれた状況と男性介護者の支援の課題について把握した。また、男性介護者の生活や苦悩を解釈し、男性介護者が必要とする支援とはどのようなものなのかを把握するために、男性介護者本人にインタビューを行った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[介護] [心中] [高齢者夫婦]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究方法

先行研究と同様に新聞記事を分析資料として用いて内容分析を行った。記事データベースはヨミダス歴史館(読売新聞)と聞蔵Ⅱビジュアル(朝日新聞)を用いて対象となる記事の検索を行った。朝日新聞では「介護」と「心中」を入れて検索を行い、読売新聞では「心中」と「老夫婦」を入れて検索を行った。②検索は2010年6月に行った。その結果、出てきた記事が朝日新聞では592件、読売新聞では87件あった。その抽出された記事から加害者と被害者との続柄を高齢者夫婦に絞り、心中に至る主な要因が介護と見られる事件を選び出した。介護にまつわる高齢者心中かどうか確認出来ないものは研究対象から除外した。心中事件は加害者と被害者の両方が死に至ることを意味するが、本研究では、被害者が生き残った場合と加害者が生き残った場合、双方生き残った場合も含めて分析を行った。また、介護保険制度導入との関連を見るために介護保険が施行された2000年を基準にして、介護保険制度が施行される2年前の1998年から2011年の間に発生した心中事件の概要を調査した。このような方法で抽出された記事をもとにして、加害者・被害者性別比較、年齢による事件数、加害者性別による事件の動機、要介護状態にあるものと加害被害の生別、介護保険制度の利用有無と心中の関連、介護期間の性別比較、家族の安否確認、遺書の有無、発見された場所、発見者、殺害及び自殺手段等について調べた。

次に、支援者の視点から男性介護者の具体的な制度の利用状況と支援の課題について、現在介護者を支援しているケアマネージャーにインタビューを行い、男性介護者の置かれた状況と男性介護者への支援の課題について把握した。また、男性介護者の生活や苦悩を解釈し、男性介護者が必要とする支援とはどのようなものなのかを把握するために、男性介護者本人にインタビューを行った。

結果

新聞記事による分析から得られた結果の中で、特に注目すべき事柄は次の点である。①高齢者夫婦の心中と殺人事件の中で加害者は男性が多く、被害者は女性が多い。②高齢者夫婦への安否確認が6割弱あったにも関わらず、介護は高齢者夫婦だけのものになり、心中・殺人事件に至っている。③介護を始めてから心中に至るまでの期間は男性介護者の方が女性介護者より相対的に短い傾向があった。

ケアマネージャーに対して行った調査では男性介護者の家事能力の不得手や男性介護者の一人で抱え込む性格、男性介護者の繊細さの無さとコミュニケーションの無さがケアマネージャーが支援していく中での大変さとして現れた。

男性介護者へのインタビューでは、「介護で困っているときは」という質問項目に自分は男性だし、無口だし、なかなか家族には相談できないという答えが返ってきた。男性は女性に比べて介護の負担やつらさを周りに相談しにくく、介護を自分一人で抱え込みすぎる傾向があった。

考察

新聞記事報道による分析から得られた結果の中で、特に注目すべき事柄は次の3点だと考える。今回の分析で最も顕著な傾向は①高齢者夫婦の心中と殺人事件の中で加害者は男性が多く、被害者は女性が多い。②高齢者夫婦への安否確認が6割弱あったにも関わらず、介護は高齢者夫婦だけのものになり、心中・殺人事件に至っている。③介護を始めてから心中に至るまでの期間は、男性加害者の方が女性加害者より相対的に短いことであった。この結果は太田(1988)、加藤(2004)、一瀬(2001)、山口(2001)、鈴木(2007)の研究結果とも共通する。

厚生労働省の国民生活基礎調査(2010)によると、要介護者等の67.2%は女性であり、75歳以上の割合が多い。主な介護者は同居の「配偶者」「子」「子の配偶者」で6割を占めている。同居している主な介護者の約7割が女性で、そのうち約6割が60歳以上である。介護を担当しているのは女性が圧倒的に多いだけに、加害者に男性が多いということは見過ごせない結果である。介護にまつわる心中事件において加害者の多くが男性であることは指摘されてきたが、なぜ男性が高い確率で加害者となるのか、男性介護者の特有な問題があるのではないかと、などの問いについて十分に検討されてきたとは言い難い。その要因の一つとして、介護保険制度の設計が男性介護者に適合的ではなかったのではないかと考えられる。本調査では、介護保険制度導入と心中の関連を見るために介護保険制度が施行された2000年を基準として、介護保険制度が施行される2年前の1998年から2010年の間に発生した心中事件を対象にして調べたが、今回の調査の結果からは介護保険の利用有無と心中の関連ははっきり分らなかった。

男性が加害者になりやすい要因を先行研究では、男性が介護を担うことになった場合、男性は介護のみではなく家事をどうするかという問題に直面(木村ら(2012)が)していると述べている。斎藤(2009)の調査でも数多くの男性介護者が家事行為について困っていることが明らかになった。困っているものとしては炊事43.3%、裁縫40%、掃除23.7%であった。(斎藤2009)これは今まで家事経験のない男性介護者が妻を介護ということになった時、妻の仕事であった料理、洗濯などをやるだけでもプレッシャーになることが推測できる。

今回ケアマネージャーに対して行った調査でも男性介護者の家事能力の不得手や男性介護者の一人で抱え込む性格、男性介護者の繊細さの無さとコミュニケーションの無さがケアマネージャーが支援していく中での大変さとして現れた。一瀬(2008)は男性介護者の介護は、女性介護者に比べ合理的であり、弱音を訴えることがあまりないと述べている。

研究成果の概要 つづき

今回行った男性介護者へのインタビューでは、「介護で困っているときは」という質問項目に自分は男性だし、無口だし、なかなか家族には相談できないという答えが返ってきた。男性は女性に比べて介護の負担やつらさを周りに相談しにくく、介護を自分一人で抱え込みすぎる傾向があり、孤立しやすい(羽根 2006)。また、男性介護者は仕事と同じように介護においてもその方針を持ち、意識的にまたは無意識的に仕事を遂行するように合理的に行う傾向がある(森 2008)。さらに男性介護者は介護のみではなく家事をどうするかという大きな困難を抱えている。これらに対する様々な支援策があると考えられるが、男性介護者特有の特徴である「一人で抱え込む」傾向から十分な支援ができない可能性がある。男性介護者は「介護に関して情報交換はしない」「一人で黙々とやっているイメージがある」などのように、女性介護者と比較して介護を一人で抱え込んでしまう、他人には迷惑かけたくないという思いで地域社会に馴染めず、一人で悩んで孤立化していく。また、コミュニケーション機会の減少は、ストレス解消の減少にも繋がるので、多くの負担を介護者自身が引き受けることの原因にもなる。

このような状況にある男性介護者の支援策として考えられるのはまず、男性が本音を話せる場の提供が重要である。しかし、周りと交流がない男性介護者がどのようにしてその場の存在について知り、どのようにしてその場に出てきてもらうかは新たな課題である。例えば、ケアマネージャへのインタビュー結果のように、話をしない人に対してはパンフレットをひそかにおいて後で見てもらえるようにする工夫が重要であり、その場に出席することをきっかけに介護体験、介護に関連して困っていることなどを本音で語りあい、介護の負担や不安から少しでも解放されることも期待できる。

以上に述べたように、男性介護者の支援策を考える際には、単に要介護者の状態に合う介護サービスを提供することだけでなく、介護者の内面を考慮した支援の必要性が求められる。

おわりに

本研究では新聞記事を用いた分析により、介護問題として高齢者心中と介護殺人事件に絞り込みその要因を考察した。高齢者の介護は育児と違い、日々の成長ではなく、日々老いていく姿をみるものであり、介護を献身的に行ってもいずれは終末を迎えることになり、その過程で喜びを得ることは少ないという特徴がある。(上田, 2001)

親族の要介護状態で介護者は精神的葛藤に陥りやすい。その場合、援助者による支援が単なるサービス導入のみで終わっては本当に彼らの介護負担を軽減したことにはならない。介護殺人などの事件の加害者は、その多くが介護に伴う困難が発生するまでは地域で特に犯罪に関わることなく日常生活を営んでいた人たちである。そのような彼らがこのような事件を起こしてしまうところに介護問題の深刻さがある。

本調査は、1998年から2010年の13年間の新聞記事を対象とし、また高齢者夫婦のみに限定しているため、件数も少なく介護心中全体にみられる傾向ということではできない。また、今回のインタビュー対象者は、研究の趣旨を理解し同意をいただいた方々であり、得られた結果がすべての男性介護者に当てはまるとは言えないが、今までの事件を分析し、これから浮かび上がる課題の克服策を考えることは事件の防止のみならず、高齢者福祉全体の向上を目指すことにつながるだろう。

参考文献

浅田洋子「在宅療養における男性介護者への訪問看護婦の支援の在り方」神奈川県立看護教育大学校事例研究集録、23、1-3、2000年。

- ・武藤宏典「介護保険制度における在宅介護」経済政策研究、第1号 2005年3月。
- ・羽根文「介護殺人・心中事件にみる家族介護の困難とジェンダーの要因—介護者が夫・息子の事例から—」家族社会学研究、(18)第1号:27-39、2006年。
- ・羽生正宗(2011)『レスパイトケア介護者支援政策形成：家族介護者の負担感分析』日本評論社
- ・一瀬貴子「高齢者の心中事件に潜む介護問題」家族研究論業(奈良女子大学生生活環境学部生活文化学研究家族研究部門)、7:25-39、2001年。
- ・加藤悦子「親族による高齢者への介護に関わる殺人や心中事件の実態」、日本福祉大学社会福祉学部・日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学社会福祉論集』第110号 2004年2月。
- ・加藤悦子(2010)『介護殺人：司法福祉の視点から』クレス出版。
- ・松本寿明「老年期の自殺に関する実証的研究」多賀出版株式会社、1995年2月28日。
- ・太田貞司「在宅ケアの課題に関する詩論」社会福祉学、28:54-75、1987年。
- ・太田貞司「都市の女性と老人介護—在宅介護の視点から—」『都市問題』、東京市政調査会、79(6)57-69、1988年。
- ・鈴木玉緒「家族介護のもとでの高齢者の殺人・心中事件」広島法学、(1)2:101-114、2007年。
- ・清水照美「老病心中1」『看護学雑誌』44(8)、医学書院、1980年a、492-499。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)